

西村 祐（音楽評論家・フルート奏者）

このリサイタルは、フィンランドと日本の作曲家による現代作品が集められた。現時点におけるフルート音楽の多様性を聴き取ることのできるプログラミングで、すでに古典と言えるものから最新作まで注目すべき作品が並んでいる。フィンランド作品はすべて日本初演と思われ、今回の演奏に注目だ。

小山がいま拠点にしているフィンランドの作品から聴く。ロッタ・ヴェンナコスキ（1970-）はヘルシンキ生まれ。ブダペストでヴァイオリンを、フィンランドのシベリウス・アカデミーで音楽理論と作曲を学んだ。現在まで活発な活動を行っており、最近大がかりなオペラを完成させたことも話題となった。

ユッカ＝ペッカ・レヘト（1958-）はフルート奏者出身。現在も演奏活動を行っているが並行して作曲のキャリアも豊富で、ラトヴィアの作曲コンクールなどで受賞歴もある。最後に演奏される《ソナタ》は小山の委嘱（世界初演）だが、楽器を知り尽くした作曲家による作品は聴き応えがあるだろう。

福島和夫（1930-）は上野学園大学日本音楽史研究所の所長も務める重鎮。《冥》は1961年に福島の恩人であったシュタイネッケ博士の追悼として作曲された。この世とかの世をつなぐ笛の音。日本人にとっては能管や尺八を想起させるような楽想だが、ヨーロッパを拠点とする小山はどのような音楽を聴かせてくれるだろう。

吉松隆（1953-）は「いわゆる『現代音楽』の非音楽的な傾向に異を唱え」る（自身によるプロフィールより）作曲家。ユーモラスな文章家として著書も多い。デビュー当初は異端視されていたが、現在では大河ドラマのテーマを担当したり、ピアノ曲などでの透明な抒情性、オーケストラ作品での色彩豊かな音楽が多く、多くの支持を集めている。《デジタルバード組曲》（1982）は初期の代表作で「機械じかけの鳥デジタルバードを主人公にした架空のバレエのための架空の音楽」。

三浦真理は1983年に国立音楽大学を卒業、以後各種管楽器のためのものをはじめ多くの作品を精力的に発表している。この《思い出は銀の笛》は1990年にフルート四重奏曲として発表されて以来、フルート三重奏、サクソ四重奏、フルート七重奏、木管フレックス五重奏など、様々な編成のために編作（多くは三浦自身の手による）され演奏される超人気作。ソロ版は2016年から翌年にかけて順次出版されている。

細川俊夫（1955-）は1976年からドイツでユン・イサンとクラウス・フーバーに師事し、1980年にダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会に参加して以来、日本の現代音楽シーンの先端を走り続けている。フルート独奏のための《線I》（1984）は「音の書」というアイディアの原点となった作品で、現在まで6曲書かれた同タイトルのシリーズ第1作。「音は空白（沈黙）から生まれ、空白（沈黙）へ帰っていく」。休符にもスラーが書かれた記譜法も含め、その後の彼の作曲活動の出発点となる重要な作品。